

活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第21号/平成22年1月29日発行 青森県立保健大学広報誌



CONTENTS

開学10周年記念事業プロジェクトについて …… 2	特別講義…………… 16
大学祭…………… 4	研究推進・知的財産センター活動報告 …… 18
サークル活動…………… 6	地域連携・国際センター活動報告 …… 19
高大連携事業…………… 8	仁済大学校への派遣…………… 20
ケア付きねぶた …… 10	卒後セミナー実施報告 …… 21
ワイガヤ会 …… 11	公開講座実施報告…………… 21
就職関係…………… 12	保護者(後援会)懇談会 …… 22
卒業生から…………… 13	保健室つれづれ…………… 22
全国学会…………… 14	出張講義及び大学見学状況/入試案内 …… 23
大学院関係・博士論文中間発表会 …… 15	人事異動/編集後記…………… 24

開学10周年記念事業プロジェクトについて — 未来への一歩 —

副学長 上泉 和子

青森県立保健大学は2009年に開学10周年を迎えました。これを記念し、2009年6月1日に開学10周年記念式典を開催しましたが、滞りなく執り行うことができましたのも、ひとえに皆様の御尽力の賜物と心より感謝申し上げます。

さて、本学では開学10周年記念式典の開催の他にも、建学の理念を今後に伝えるべく今年度を通じて様々な各種記念プロジェクトを実施しておりますので、ご紹介いたします。

① マスコットキャラクターの作成について

本学は、地域に根差した大学であり、地域に愛される大学でなければならないと考えます。そこで、地域の皆様に本学のことをもっと知っていただき、応援する気持ちを寄せていただきたい、また全国の方にも本学のことをより知っていただきたいと考え、本学オリジナルのマスコットキャラクターを作成することといたしました。



決め手くん(左)とモーリー(右)

キャラクターのデザインは、美術系の大学で学ぶ学生に依頼しました。開学当初に考案された現在の本学ロゴマークをもとに、大変可愛いキャラクターが完成しました。頭には「青森県立保健大学」の頭文字である「AUHW」の文字をあしらひ、胸には真っ赤なハートを持っているのが特徴で、体そのものの青色と合わせて動脈と静脈を表現したそうです。「モー

リー」という名前は、青森県を代表する大学となってもらいたいという思いから名づけられたということであり、まさに、「いのち」を育んできた創造性と四季豊かな自然に恵まれた地域特性を生かした教育研究活動を進める本学に相応しく可愛らしいマスコットキャラクターが完成しました。

10月10日には着ぐるみもお披露目することができ、本学の活動の紹介役として幅広く活躍していきます。今後も、「モーリー」ともども、本学へのご支援をよろしくお願いいたします。

② 学生ねぶた「鐘軌」の製作について

学生自治会がねぶた実行委員会を組織し、約1ヶ月かけて本学オリジナルねぶたを製作しました。ねぶた師竹浪比呂央氏監修のもと、青森ねぶた祭に出陣しているねぶたと比べても見劣りしない、立派なねぶたになりました。

「鐘軌」様は、学業成就と健康の神様であり、人々の健康と生活の向上をめざし、高度な専門性と豊かな人間性を備え、ヒューマンケアを身上とする教育、研究、実践に従事する人材を育成する本学の理念をそのまま反映したねぶたです。



学生ねぶた「鐘軌」

10月10日の大学祭では、たくさんの地域の方々も参加していただき、本学周辺地域を運行しました。青森ねぶた祭の時期とは異なり肌寒くも

ありましたが、参加した学生や地域の皆様からは、とても熱いお気持ちを頂戴いたしました。ねぶたを通じて、地域の皆様とより交流できたのではと感じます。現在は、同時に製作した金魚ねぶたとともに、学内に展示しております。



ねぶた実行委員会

③ タイムカプセルについて

学生たちが思い思いの品を詰めたタイムカプセルを、10月10日に設置いたしました。一般的なタイムカプセルとは異なり、土中に埋設するのではなく、その形が見えるように特設ボックスを作成し、その中に設置しております。本学教育研究B棟グラウンド側に設置しておりますので、どなたでもご覧になることができます。



タイムカプセル

学生たちの思いが詰まったタイムカプセルは、10年後の2019年の大学祭にて開封される予定です。10年後、社会の一員となりその中核的な役割を果たすことのできる人材となっ

た学生たちが、当時を懐かしむ一つの糧を提供できたのではと考えます。また、このタイムカプセルが、今後10年間、これから巣立っていく学生たちと本学とを繋ぐ役割を担っているのです。

④ “光の森” プロジェクトについて

このプロジェクトは、地域の皆様とのさらなる交流を目指し、10月1日から1ヶ月間行いました。本県大間町出身の彫刻家向井勝實氏が本学で彫刻制作活動を行い、地域の皆様、小中学生及び高校生、さらには本学学生もたくさんご参加いただきました。

皆で一緒に制作活動を行い1つの作品を作り上げるということは大変良い思い出となり、今後もこの作品を通じて地域の皆様と交流を深めていければと考えます。この彫刻は、近日中に本学体育館前に設置を予定しております。



制作活動中の向井氏(右)

このように、開学10周年を記念して今年度は様々な事業を展開して参りました。事故なくすべての事業を進めることができましたのも、本学学生並びに本学関係者の努力と地域の皆様のお力添えがあったからこそと思います。これらの事業が、この先の10年、またその先の未来へと歴史を重ねる飛躍への第一歩となるよう祈念いたします。

第11回大学祭を振り返って

大学祭実行委員長(看護学科3年) 立花 理恵

はじめに

第11回青森県立保健大学大学祭は、10月10日(土)、11日(日)に開催されました。

今年のテーマは、「らっせらでつなぐ架橋～10年は通過点に過ぎない～」です。青森県立保健大学は、今年で創立10周年を迎えました。10周年を基点として、ますます発展していくために、保健大生だけではなく、地域の皆様方の力も必要になると考えました。そこで、青森市の有名なねぶた祭りの掛け声「らっせら」に、「力を合わせる」こと、また、「一体感」という意味をこめ、大学祭が、学生と地域の皆様との一体感を芽生えさせる架け橋になることを目標としこのテーマを設定しました。このテーマを目標とし、夏休み中から委員会メンバーとともに準備を進めてまいりました。

大学祭当日は天候には恵まれませんでしたが、全日程を予定通り行うことができました。

大学祭で行った大学祭実行委員会による企画を以下に紹介します。

- オープニングセレモニー
- 近隣幼稚園・保育園の園児による絵画展示
- オープンキャンパス・アゲイン
- 縁日
- スタンプラリー
- 花火打ち上げ
- 後夜祭
- お笑いライブ
- 安生園との交流会
- 青森大学との交流試合
- 中夜祭
- 10周年記念事業



実行委員メンバー



模擬店

この他にも、バンド演奏や作品展示などのサークル企画や模擬店、教員・学生による展示・発表も行われました。また、外部企画としては日本原燃によるエネルギーコーナー、安生園と三味線サークルとの合同演奏会、小規模作業所など外部団体による展示即売会、青森県牛乳普及協会による骨密度検査、青森モータースクールによる無料適性検査が行われました。

そして広報活動では、企業への連絡や協賛金の依頼を行い、昨年と同様、約30の企業から協賛をいただくことができました。ポスターやパンフレットも、私たちのパワーや勢いが伝わってくる、とても素晴らしいものができると思います。

大学祭を振り返って

今年度の大学祭を振り返ってみると、大きな事故や怪我人が出ることもなく、無事に2日間の日程を終えることができ、本当によかったと思います。今年は昨年より、さらに模擬店の出展数や企画も多くなり、来場者数が例年より多かったように思えます。学生一人一人が、大学祭を盛り上げようとしている姿勢が、来場された方たちに強く伝わったからではないでしょうか。

しかし、大学祭当日は準備不足のために、さまざまな場面で学生の皆さんをはじめとして多くの方々にご迷惑をおかけしてしまいました。この場をお借りして、お詫びを申し上げます。



彫刻



彫刻

今、思うこと

私が大学祭実行委員長になったきっかけは、学生部長の藤井先生から突然お願いされたことです。

それまでほぼ大学祭に関わっていませんでしたが、副実行委員長ですらなかった私に何故か矛先が回ってきて、いつのまにか大学祭実行委員長になっていました。人前に出ることがあまり好きではなく、ましてリーダーになるのも嫌だったので、はじめのうちは正直困惑しました。しかも今回の大学祭は、10周年ということで初めての試みも多く、どうすればいいんだろうというクエスチョンマークでいっぱいでした。そんな時、大学祭実行委員会のメンバーが知恵を貸してくれたり、積極的に仕事をしてくれたりして、スムーズに進行していったので、無事に成功を収めるまで

にいたりました。夏休み中、自宅に帰りたいと連呼しながら、ほぼ毎日大学祭の仕事をしたのはいい思い出です。



絵画展示

おわりに

今回の大学祭は、大学祭実行委員会のメンバー、自治会の方々、事務の職員さんたち、先生方、とにかくたくさんの人に助けられてここまでできました。

本当に、ありがとうございました。

一人の力ではできないことでも、多くの人を借りることで、たくさんの可能性が広がっていくということを、大学祭を通して改めて学んだ気がします。

本当にお疲れ様でした。



モーリー

サークル活動について ~自由に楽しく~

看護学科3年 下道 麻理子

ソフトテニスサークルは、「自由に楽しく」をモットーに活動しています。毎週火曜日・金曜日・土曜日が主な活動日となっており、サークルメンバーは経験者・初心者に関わらず様々な人が在籍しています。活動内容としては乱打や簡単なゲーム、自分がやりたいことを自由に行っています。立て直した当初は人数もとても少なかったのですが、現在ではメンバーも増えました。

サークルは活動していない日もよくあったりと基本的にゆるい感じなのですが、何にも縛られることなく、自由に体を動かして楽しんでいます。大会に出場したりするわけではなく、「打ちたいな」と思ったときに友達同士声を掛けたりして気軽に参加する感じです。日々大学の授業や課題に追われている中で、サークルはちょうど良い息抜きの場にもなり、適度な運動にもなります。ソフトテニスというスポーツはあまり馴染みがないかもしれませんが、メンバーみんなソフトテニス大好きです。サークル日以外で打ちたくなったときは、たまにメンバーと学外の施設に打ちにいったりもします。

サークルの活動が不定期なため、他学年が交流する機会も少ないのですが、今年の大学祭では1~4年生みんなで協力して楽しく無事に成功させることができました。先輩・後輩という固い線引きはなく、全体的にわきあいあいとした雰囲気を感じます。

自由な部分も多くありますが、それが逆に良い所でもあるのかなと思います。サークル活動をすることで人の輪も広がったり、自分のスキルアップにつなげたりすることもできたりと、様々な面で利点は多くあると思います。これからもみんなでソフトテニスを一生懸命楽しんでいきたいです。



ソフトテニスサークル

Enjoy ソフトボール!!

社会福祉学科2年 木内 祐一

私たちソフトボールサークルは毎週土曜日の午後に天気良ければグラウンドで、天気が悪ければ体育館で活動を行っています。もちろん経験・未経験や男子・女子などは関係なく、ソフトボールを楽しみたいという人から、単純に体を動かしたいという人まで、いろいろな人たちが集まって楽しく活動しています。普段の活動はそのときに参加できる人たちが集まるといったように、誰でも気軽に参加できるものです。また、活動内容もキャッチボールや簡単なノック・試合がほとんどなので、初めて参加する人でも楽しく活動できると思います。

サークル活動以外でも大学祭に模擬店を出店したり、サークル活動後にみんなでご飯を食べに行ったり、新入生歓迎会や忘年会などの行事を企画したりと様々なことを行っています。特に大学祭については交流を深める良い機会となっています。大学祭ではみんなで意見を出し合いながらどのような店にするのか決め、協力して準備を行っていきます。準備の期間が短かったり、遅くまで残って準備したりと大変でしたが、その分やり終えたときにはよりサークル内での絆を深めることが出来たと感じました。

このようにソフトボールサークルでは毎週のサークル活動はもちろんのこと、それ以外でも様々な行事を行うことで、サークル内での交流を深め、より楽しいサークルを目指して活動を行っています。これからも誰もが参加したくなるようなサークルを目指して、活動していきたいと思っています。保健大学に入学して、何かサークルに入りたいけど、どのサークルに入ろうか迷っている人がいれば、ぜひソフトボールサークルに参加してみてください。優しく、おもしろい先輩たちといっしょに大学生活の楽しい思い出を作ることが出来ると思います。



ソフトボールサークル

サークルコパン

栄養学科2年 山本 愛子

サークルコパンは、「コパン」という名の料理サークルです。主な活動は季節ごとの料理作りで、4学科の交流を図ることを目的として活動しています。大学祭ではお菓子を作り、訪れてくださった方たちに販売を行ったりします。

サークルコパンの「コパン」とは、ラテン語で「仲間」という意味を持つ単語で他の学科、他の学年と楽しく交流をしようという意味がこめられています。活動時にはメンバーに連絡を取り、来れる人が参加するという形で、気軽に自由に行っています。サークルのメンバーは、お菓子作りや料理作り、食べることが好きという人が多いです。また、平成20年度から栄養学科が設立されたので、メンバーの数が大幅に増えました。以前は看護学科の人が多かったのですが、現在では、社会福祉学科や理学療法学科のメンバーもあり、にぎやかに楽しくやっています。いろいろな学科の人がいるので、他学科の人と仲良くなれたり、その学科の授業の話や先生の話などを聞けたりできます。

今年は、お好み焼きやパウンドケーキを作りました。また、大学祭でもパウンドケーキを販売し多くの人に食べてもらうことができました。活動自体が不定期で多くないので、これからは活動を増やしていき、いろいろなお菓子や料理を作っていけるようにしていきたいです。



お好み焼きを作った時の活動風景です。

発達保障研究会

社会福祉学科3年 中嶋 千聖

発達保障研究会は知的障がいを持った高校生以上の方を対象に、「学び」の場を提供する活動を行っています。その「学び」の場として年4回、保健大で開催しているのがオープン・カレッジです。

オープン・カレッジは現在、社会福祉学科の学生が中心になって運営しています。参加者を受講生とし、運営主体の学生スタッフとオープン・カレッジ当日に受講生や講座をサポートする学生ボランティアのサポーターで支えられています。オープン・カレッジへの準備は毎回大変ですが、非常にやりがいがあるサークル活動であると感じます。また、受講生との交流も魅力のひとつで、様々な人と接する機会が多くなります。知的障がいを持つ方との交流に興味がある学生にはおすすめのサークルではないでしょうか。

オープン・カレッジは単なる知的障がいを持つ方の「学び」の場だけではなく、学生も多くのことを受講生とともに学ぶことのできる生涯学習の場でもあります。大学の講義だけでは得られない知識や経験ができるので、興味のある方には是非サポーターとしてオープンカレッジに参加してほしいと思います。



オープンカレッジでの展示

高大連携における教育の 質向上に向けた授業展開

栄養学科准教授 浅田 豊

本年度、人間総合科学科目のグローバル社会と文化では、青森東高校から4名の生徒さんの参加を得て、本学2・3年生学生との合同の授業形態として展開してきました。授業内容は開発と文化を中心とする幅広い教養を身に付けるとともに、国際人としての資質を涵養することに主眼を置くものです。学習の質を高める上での主たる工夫として、まず授業各回にオリジナル教材を基にしたグループディスカッションの場면을効果的に組み込んでいます。その際トピックスを予め何段階かに分割し、グループ単位でひとつの問題解決が達成できれば次の段階へとステップアップを図ることができるプロセスとしています。また学習課題を参加者に主体的に選択あるいは導出させ、その上で個別の学習・発表支援等をきめ細やかに行ないました。

その結果、「グループワークがとても参考になった」あるいは「発表は緊張したが良い経験になった」、「開発途上国に行って現状を見てみたい」といった率直な感想が寄せられています。今後の継続的・発展的な学習意欲につながる成果も含まれると評価できます。次年度以降もさらに質の高い教授内容を提供できるような授業設計に取り組みたいと考えます。

高大連携について

看護学科教授 大関 信子

今年度の「医療人類学」は受講生が多く、週2回の開催となった。3限目は、本学の学生が147名出席し講義形式の授業となった。高校生は6限目の授業に参加していただき、本学学生も含め28名の出席であった。こちらは、学生が調べてきた内容をパワーポイントで発表し、その情報を用いて4名（本学学生2名と高校生2名）でグループディスカッションを行い、テーマに対する理解を深める形式をとった。

最初の頃は、口数の少ない高校生であったが、後半からは自分の意見をまとめて発表できるようになった。また、毎回、メンバーを変更することにより、新しい人とのコミュニケーションで生じる「ためらい」を瞬時に取り除き、昔からの親友のように自分の意見を自由に言えるようにトレーニングすることで、高校生も知らない人と話すことに自信がついたと思う。また、高校生も本学学生と一緒に、テーマの一部について調べ、パワーポイントを作成し、パワーポイントを使い発表する機会を作った。その結果、高校生もこのような形

での学びの楽しさを体得してくれたと思う。

「医療人類学」というテーマで、このように多くのことが要求される授業ではあったが、高校生は大学生と同等に十分に課題をこなし深く学ぶことができたと思う。



修了式における学長の挨拶

理学療法原論； 高大連携授業を終えて

理学療法学科講師 盛田 寛明

高大連携授業として、理学療法学科の「理学療法原論」では8名の青森東高校生を受け入れた。この授業では、理学療法の全体像や理学療法士としての資質など基本的な内容を学ぶことが目的であった。毎回の夕方からの授業に加え、授業時間外のグループ研究などが課され、高校生にとって負担増となることを懸念したが大部分の受講生は大学生に負けず劣らず頑張っていた。毎回の授業で理学療法士の実際の業務場面のDVDを教材に使用したことで、障害を持つ方々とその生活環境について理解を深めるとともにチーム医療における医療専門職種である理学療法士の姿を具に目にすることができ、高校生にとっては新鮮な体験だったであろう。また、特に苦労したのはグループ研究とレポートであったのではないだろうか。自分で言いたいことを決め、資料を探して読み、整理して考え、発表して原稿を書くという過程を経る必要があったため、授業中に戸惑っていた場面も少なからず見受けられた印象がある。この、自分で疑問を追求し、問題解決する意識をもつことがこの授業の目標の一つでもあった。教師から教えられるという受け身でなく自分から主体的に考えていくことの重要性を、高校生は痛感したと思う。

高校と大学が円滑な連続性のある教育を行っていくためにも、高校生が大学レベルの授業内容に触れる機会が増加していくことは望ましいと考える。今後の課題として、高校の行事や試験準備のために大学の授業を多数欠席するなど高校生にとって負担となる場面がみられた。「高校生にとっての参加のしやすさ」と「大学の各学問分野の特質に対する十分な理解」を両立させる

ことができる高大連携プログラムの推進が望まれよう。

「高大連携」

— 社会福祉導入科目の高校生への授業提供 —

社会福祉学科准教授 増山 道康

社会福祉士関連の法制度改正により社会福祉士受験資格科目が大幅に改訂され、本学でも新1年生から授業科目が大幅に変更となり、その中に導入科目として「社会福祉基礎論」がおかれた。この科目は、従来の「社会福祉学概論」の内容の一部を取り出したもので、社会福祉の歩みや理念等の理解と児童・障害・高齢等社会福祉の各分野の概要理解が主となっている。

高大連携授業として、社会福祉の最も基本的な部分や各分野へのいざないとして高校生も興味を引かれるであろうと考え、これを提供することにした。

導入教育自体、新しい教育概念に基づく授業であり、社会福祉学全体の中で明確に位置づけられているはと言いきれないが、必ずしも社会福祉職をめざす学生のみが全てではない現状で、大学の初学生に興味関心を抱かせる授業は、高校生の福祉への興味関心も高めることができると考えた。

1年生の専門支持科目と連動して授業を行った結果、毎回の授業のつながりが一部わかりにくかったことが、来年度に向けた反省点である。導入教育を高大連携で開講した効果と不十分な点を吟味し来年度につなげていきたい。

平成21年度高大連携事業報告

— 科目「健康と栄養管理」を通して —

栄養学科 藤田 修三

平成21年度高大連携事業のひとつとして、栄養学科の専門科目「健康と栄養管理」を担当しましたので、ひと言感想を述べます。この科目は、栄養学科のカリキュラム体系、食生活・栄養と健康・疾病の関わり、科学的根拠に基づく栄養実践、わが国の栄養政策、管理栄養士のキャリアデザインなど、栄養のエキスパートを育てる、夢をふくらませる入門科目です。そのため参加した4名の高校生さんに、理解が容易であったかと思えます。

講義は、座学だけではなくミニ講義とグループ学習を組み合わせた双方向のキャッチボールの内容で、教育方針である主体的学習者の育成、現場でのコミニカル共同作業をイメージして進めました。グループ活動では新入生、編入学生に高校生が仲間入りし、最初は遠慮気味ではありましたが、時間とともに発言し、発表の準備にも積極的に取り組み、行動の変容があっ

たと考えられます。そのことは、受講レポートに健康問題を前向きに考えた軌跡がみられ、例えば、健康の情報をどのように伝えるかが最も難しく、解決策として一人一人が気をつける事が基本であることの認識、また健康は一人一人の意識によっていくらかでも変えられるという意見もありました。高大連携には主に2つの意義があるといわれますが、高校側の教育活動等のニーズではなく、生徒が、自らの考え方、生き方について考える機会となり、講義だけにとられない大学での学びを体験したものと思います。

人びとが幸せになるための食生活を追求する

「健康と栄養管理」担当 栄養学科 吉池 信男

今年から、平成20年度に開設された栄養学科の専門科目の中からも、「高大連携」の中で受講可能な授業を設けました。「健康と栄養管理」は、管理栄養士をめざす勉強の“第一歩”として、入学早々から開始される授業です。「栄養」とは何か、「管理栄養士」が社会の中で期待される役割、地球規模での人びとの健康と栄養の関わり、青森県における食生活と健康の課題など、講義とグループワークを通じて学んでいきます。

さて、今回は4名の高校生が受講しました。初回の授業からグループワークを行いました。高校生が加わった4グループでは、入学したばかりの1年生諸君がうまくサポートしてくれた様です。高校生が特に興味をもったことは、途上国の栄養問題であり、地球全体では飢餓や低栄養が未だに大きな問題である一方、「飽食の社会」といわれるわが国での若者の食生活の乱れなどでした。栄養や食生活の問題は常に自分自身や家族などにもかかわる身近なことであり、さらに「科学」として専門性の高い領域でもあります。そんなおもしろさを、今回の受講を通じて感じてもらったのではないかと思います。



修了式の風景

ケアつき青森ねぶたじょっぱり隊～ボランティア活動とヒューマンケア

地域連携科委員 看護学科 千葉 敦子

青森ねぶたは青森の短い夏の夜を鮮やかに彩る伝統的な火祭りです。この祭りに、全国各地から高齢者や障がい者の参加者を募り、ともに心ゆくまで楽しもう、とスタートしたのが「ケアつき青森ねぶたじょっぱり隊」です。平成8年に実行委員会が結成され、発出陣から今年で14回目を向かえました。実行委員長は静岡県立大学学長補佐・紙屋克子さん、事務局長は特別養護老人ホーム清風荘の施設長・長根祐子さんです。実行委員は清風荘のスタッフを始め、医師会、企業、行政、ボーイスカウト、専門職等、数多くのボランティアによって運営されています。

本学では発足当初より少数の教職員や学生がボランティアとして参加していましたが、平成20年からは地域貢献事業と位置づけ、大学をあげてボランティア活動に参加することになりました。平成20年のボランティア参加者数は学生および教職員をあわせて57人、平成21年は約100人でした。

今年のあしあとを振り返ってみます。4月には、1年生4学科合同授業「健康科学概論」の中でケアつき青森ねぶたじょっぱり隊の紹介をし、生活と看護について、そしてボランティア活動とヒューマンケアについて考えてもらいました。多くの学生がこの有意義な活動に興味関心を示しました。もともとヒューマンケアを学びたいと望んで入学してきた学生ですので、ボランティアマインドは強いようです。しかし、いざ行動！となりますと、それには少しばかりの勇気ときっかけと知識が必要なようです。そのために、ボランティアとは何か、ケアつき青森ねぶたとどのような活動か等について、7月にボランティア養成講座を2回開催しました。この講座は保健医療福祉特殊講義の単位認定講座となっています。

ケアつきねぶたのボランティア内容は多岐にわたります。主なものは、運行班（熱く燃え隊）、設営班（重いもの持隊）、備品班（何でもそろえ隊）、食料班（ごちそうし隊）、医療班（命預け隊）等です。ボランティア参加者はこれらの中から自分が希望する活動内容を選択することになります。本学では、養成講座でボランティアの心得を学び、心の準備をし、さらに、直前には学内で車椅子の押し方や跳ね方等の練習をし、自分が選んだ活動において、おもてなしの心で参加者と共に楽しむ事をモットーに本番に望みました。ボランティア

を終えた学生の感想をまとめると、次のような学びがありました。「他人の喜びを共に喜べる人になれる」「一生懸命生きる人への敬意を実感する」「周囲への感謝の気持ちを持つことが出来る」「自分の役割に責任を持つ」「何も出来ない自分に悔しさを感じる」「学びの意欲をもつ」「自分で考えて行動することの必要性を知る」「一人ひとりの力を集めサポートすることを実感する」「次のボランティア活動への意欲が増す」「感動を味わう」等です。ケアつきねぶたへのボランティアの参加は、人として、専門職としての成長の機会を与えるきっかけを与えてくれたようです。

今年は、初の試みとして学生と教員との架け橋を担うリーダーを募集したところ、6人の学生が応募してくれました。栄養学科1年生の曾我美沙希さん、丹代靖子さん、山内朝陽さん、看護学科編入生の大和田芽衣子さん、太田有美さん、杉目真梨さんの6人です。この6人が大きな活躍をしてくれました。缶バッチの考案と作成にはじまり、歓迎レセプションでのアトラクションの企画・演出、ボランティア宣誓、学生への伝達、そしてオリジナル振り付けの考案です。この振り付けは青森を表現した決めポーズをとり入れるなど、若さをアピールしたものとなりました。6人にとっては、授業を終えての打ち合わせや試験期間中の練習など、負担は決して小さくなかったと思われそうですが、終わったあとの達成感はひとしおだったようです。この活動が学生の中に根付き、主体的、積極的な活動に発展していく兆しを感じられました。

これらの大学生活でのボランティア体験が将来のヒューマンケアにきっと役立つ事でしょう。あたりまえのことがあたりまえにできる社会のために（21年度ケアつきねぶたテーマ）



じょっぱり隊の皆さん

ワイガヤ会について（里山の蕎麦屋になろう）

大学コンソーシアム青森の7大学における研究シーズから、新しい研究テーマ等を発掘する為のサロン風・意見交換会の開催を提案し、本年6月より、大学コンソーシアム事務局、本学地域連携推進課及び研究推進・知的財産センターにて 略毎月1回の頻度で、ワイガヤ会を運営してもらっています。ワイガヤというのは、「ワイワイガヤガヤと何でも話そう」という趣旨から、「ワイガヤ会」と命名しています。運営方法は毎回、話題提供者より、30分程話をさせていただき、その後、その話をキッカケとして、各人が思う事・考えている事等、何でも構いませんので、話をして頂きます。話をし易くする為、アルコール（ソフトドリンクもあります）、軽食を準備しています。その為、毎回1,000円会費を頂戴していますが、会費低減の為、スポンサーが見つからないか思案中です。

話題提供者による話題を話しのネタにしていますが、勿論全く関係ない話題でも歓迎しています。まず、お互いの顔・名前を知っていただき、新しい出会い・新しい研究テーマに将来つながれば、という趣旨となっています（出会い系サイトの一つです）。

現在、大学コンソーシアム青森の7大学には360名の教員が在籍し、その内訳と学部・学科構成は下記の様になっています。

	学 部 ・ 学 科	教授	准教授	講師	助教	助手
青 森 公 立 大 学	経営経済学	28	16	0	0	0
青 森 大 学	経営学・社会学（社会/社会福祉）・ソフトウェア情報学・薬学	55	23	18	4	1
青 森 短 期 大 学	地域創造学（子ども・ビジネス）	4	5	3	1	0
青 森 中 央 学 院 大 学	経営法学	13	7	10	1	0
青 森 中 央 短 期 大 学	食物栄養・幼児保育・看護	11	11	14	4	6
青 森 明 の 星 短 期 大 学	子ども・現代介護福祉	13	4	5	0	0
青 森 県 立 保 健 大 学	健康科学（看護・理学療法・社会福祉・栄養）	29	17	22	16	19

重複している様に見える分野、一方、研究者が不足していると思われる分野があることが想像できますが、まずこれらの研究者の中から新しい研究テーマ等が生まれてこないか？それらの研究を行うに当たり 不足している分野の研究者をどう補うか、等が今後のテーマではと考えました。もう、医工連携は当たり前。現在の健康科学分野での研究活動に、例えば芸術文化の視点を加え、新しい研究テーマが生まれてこないか等々、期待している所です。

これらの研究活動の結果、「あの調査・研究について調べるには青森に行け」というオンリーワンの研究がより多く生まれたら、と思います。これを例えて言うならば、里山の蕎麦屋になる。その蕎麦を食べに 都会・他地方から、わざわざこの里山に出向いてくる。そんな蕎麦屋を目指したい、と考えています。ここでしかない、ここしか研究をしていない、という研究地域・大学を目指したいという事です。

但し、この研究に挑戦してみよう、と考えるのは研究者自身であり、こちらは環境を調えるだけとも言えます。馬を水場に連れて行き、且つ水桶に馬の頭・顔を突っ込ませても、馬に水を飲む気が無ければ水を飲むことは出来ないという喩の様に、（別に先生方が馬に見える、という訳ではありません） 飲みたくなる様に環境を整えておき、飲みたいと思ったら直ちに対応できる様にしておく、というのが大学の知財ではないかと考えています。

この様な考えで 富山大学・岐阜薬科大学等での大学知財活動を行ってきましたが、組織の大小に関わらず、学内には見えないバリアがありました（隣は何をする人ぞ）。そこで知財という手段を用いて、どこにでも顔を出す。別名「何でも探偵団」「どこでもドア」「ドラエモンのポケット」とも言われてきましたが、あくまで黒子です（主役は先生方）。教育・研究・社会貢献の中で知的財産を利用してもらえれば良い。知財は手段であって目的ではなく、一つの選択肢である、という認識です。現在までのワイガヤの実施状況は以下の通りです。

回	日 付	所 属	話題提供者	話 題
1	6/23 (火)	青森県立中央病院神経内科部長	馬場正之 先生	音楽の神経学的側面
2	7/28 (火)	青森県産業技術センター弘前地域研究所	工藤洋司 氏	玩具を通じた教育
3	8/31 (月)	青森県立保健大学健康科学部看護学科助教	舟木 淳 先生	ドクターヘリ「飛ぶ救急救命室とフライトナースの役割」
4	9/28 (月)	八戸高等工業専門学校物質工学科教授	佐々木有 先生	発ガン抑制を中心とする機能性食品
5	10/31 (土)	国立大学法人弘前大学教育学部教授	今田匡彦 先生	サウンドスケープ思想（音響生態学）と音楽教育
6	12/ 4 (金)	青森大学ソフトウェア情報学部		青森をまるごとデジタル化-「デジタル青森」プロジェクト
7	1 月 頃	青森中央学院大学	内山 清 先生	国際グリーンツーリズム&スポーツコミッションを目指して（仮題）

話題提供者も公募予定ですので、我こそは、という先生方も歓迎致します。全く分野が異なる研究者同士の意見交換を狙いとしていますので、テーマに関係せずに、フラッと立ち寄るとするのが理想ですが、運営する側の立場上、準備等の為（何しろ、ビールを買っておく必要がありますので）、事前に参加申し込みをしていただければ助かります。

最後にもう一度、現在の研究領域にとらわれず、新たな発想を求めて先生方の積極的参加をお待ちしています。里山の蕎麦屋にむけて。

第8期生就職活動状況

就職対策委員会

一般求人が大変厳しいと言う情報の中、8期生の就職活動もいよいよ本格化し、4年生は就職活動に真剣に取り組んでいます。本学では、就職対策として就職に対する意識を高めるため、以下の事業を行なっています。

1 就職合同説明会の開催

病院・社会福祉施設の人事担当者と学生(3・4年生)が直接面談して、情報交換する場であり、高い就職率の維持、県内定着率の向上を目指して、6月(看護学科・社会福祉学科)と7月(理学療法学科)に開催しています。学生は多くの病院・施設の担当者から直接情報を得て、より自分に適合した就職先の開拓の場となっています。

2 学科別就職ガイダンス・就職支援セミナーの開催

各学科の特性に即した就職指導を行なうため、3年後期と4年前期に学科別を実施しています。今年度から就職活動への意識向上のため、学年別に合ったテーマで就職支援セミナーを開催しています。特に3・4年生には卒業した先輩から就職活動体験報告を話してもらい、又、外部講師として就職指導カウンセラーを招きセミナーを実施して好評を得ています。



合同就職説明会

【8期生就職内定状況 単位：人】

H21.11.11現在

学 科	卒業予定者	就職希望者	就職内定者
看護学科	106	106	64
理学療法学科	26	25	6
社会福祉学科	42	42	12
合 計	174	173	82



就職支援セミナー

全学教職員が一丸となった就職対策・支援の状況

栄養学科准教授 浅田 豊

本学では全学を挙げて、また各学科において、就職合同説明会・ガイダンス・各種講座の開催や就職情報の提供、学科単位でのきめ細かい指導助言といった大変有効な就職対策支援が進んでいると捉えられます。そういった中で、筆者はとくに法人化以降において、3、4年生学生のニーズに応じた就職指導・支援に従事しています。本誌のような媒体を通じた就職支援状況の広報は、在学生を含め保護者の皆様や広く地域の皆様方に就職支援の現状や実際の諸活動等をお知らせし、そのことで学生の自己実現や就業に関する意識の向上、並びに一人ひとりの計画的効果的な就職活動の手助け、あるいは今後の就職指導全般・進路相談機能の充実等につながる意義を有すると考えられます。

そこで今回は、筆者の取り組みの概略を紹介し今後に向けての総括ができればと思います。例年、筆者は3、4年生学生や各学科のニーズに基づき「就職試験対策と履歴書の書き方」等のテーマで各2時間の講義を担当しています。そこでは「人間性を高めること」「専門性を磨く向上心をもつこと」「チームの一員であること」といった保健医療福祉専門職従事者にとっての基礎的な心構えに始まり、即戦力性や利用者中心のケア実践(利用者の生活や意見の尊重)、主体的で生涯を通じた学習を行う能力、研究発表の力、地域特性や地域資源の把握の重要性について講じます。その上で、自分の魅力の再認識と自己PRの方法や志望動機の明確化のし方を教授し、さらに進んでお互いに面接官役を交替で演じながらペアになっての演習では、「あなたの目指す〇〇士、〇〇師像を具体的にお話ください」「実習を通して学んだことや反省点は？」等の10の質問を出し合います。そのトレーニングを通じ、頭の中で考えること(認知やイメージ)と、文章にしてみること(言語化)、実際に話すこと(口頭表現)、相手に伝わること、相手がどのような印象を持つかは、それぞれ異なるという点を理解していくと思います。また人は誰でも、話し方に癖・特徴(目線、声の大きさ、話す速度、センテンスの長さ、スピーキングノイズ、内容、質問と答えのねじれ他)があることも分かるでしょう。このような講義以降に、各学生の求めに応じて、個別の指導・助言を進めてきています。今後も、一教員として自らの実践にさらなる工夫・改善を施した上で、全学教職員が一丸となった就職対策支援に微力ながら参画できればと思います。

MESSAGE FROM GRADUATES

出会いを大切に

松田 亜弓
(看護学科7期生)



大学を卒業し、実際に看護師として働きはじめて約半年が経ちました。実際に看護師として働いていると「もっと勉強しておけば良かった」ということを強く実感します。実習で受け持った患者さんに対し勉強不足でしてあげられなかったケアがたくさんあったことに気がつきました。その当時は自分なりに頑張っただけで勉強して臨んだつもりだったのですが、勉強不足が身に染みしました。大学時代をほとんど無勉強状態ですごしたため後悔する日も多いです。勉強するのに無駄ということはないと思います。気になったことを調べてみるなど少しずつでも勉強しておくことをおすすめします。勉強だけではなく、大学時代には人との関係も大切にしたいと思っています。仕事が辛いとき、私を励まし支えてくれるのはやっぱり友人でした。大学の友人だけでなく学外の友人や家族、恋人、大学の先生方などいろいろな人との関係はきっと支えになってくれると思います。就職して離ればなれになってしまう人もいますが、大学時代での出会いを大切にしてください。

就職して半年以上が経ち、私の二度目の社会人生はそれなりに安定し、仕事に慣れてきた、という実感もあります。ですが一方で、自分のしている治療が本当に患者さんのためになっているのか？という不安は尽きません。その部分が、専門職の大変さだろうと感じています。理学療法は医師の指示のもと治療を行います、その方法は理学療法士によって異なります。自分の治療に責任を持って行わなくてはなりません。最近の私は仕事に慣れてきたという実感がありますが、完全には慣れてしまわずに、緊張感を持って治療していきたいと思います。自分の知識と技術を日々磨き続けて、本当に自信を持って理学療法士と名乗れるようになりたいと考えています。

MESSAGE FROM GRADUATES

専門職として

木村 喜子
(理学療法学科7期生)



3月に保健大学を卒業し、現在市内の病院で理学療法士として働いています。社会人として入学し卒業した私にとっては、社会人復帰ということになります。前の職業はコンピューター関係の仕事で、新しい事を覚えるのがとにかく大変だった記憶があります。今回の社会人復帰は、4年間勉強した事を使って仕事をする訳ですので、前回のよう戸惑いはありません。治療単位をとって理学療法士と名乗るようになった事に、いちいち嬉しさを感じています。病院に来られる患者さんは個性的な方ばかりで、日々刺激を受けます。話し好きな患者さんが多く、リハ室は笑い声が絶えません。学生の頃は、治療をどう進めるかで頭がいっぱいでしたが、患者さんたちのおかげでそれなりに余裕を持って治療ができるようになりました。

MESSAGE FROM GRADUATES

活発なMSWを目指して

今 栄利子
(社会福祉学科1期生)



私が大学を卒業し、MSWとして入職してから6年が過ぎました。今思えば、最初は業務についていくことだけで精一杯の日々でしたが、異動などを経て、ようやくMSWらしい仕事ができるようになったような気がしています。しかし、壁にぶつかり悩むこともよくある反面、新しい発見もあり、まだまだ新鮮な毎日を送っています。

私は、現在回復期リハビリテーション病棟で、整形外科疾患と脳卒中の患者さんの担当をしております。私の所属する病院は、入院時から患者さんを担当します。限られた入院期間の中で、安心して退院できるように支援するため、常に情報のアンテナを張り、また患者さんや家族の方に相談してもらえ環境作りを心がけています。

私がここまでバーンアウトせずにやってこれたのも、「仲間」がいたからこそ感じています。職場や趣味の仲間はもちろん、社会福祉士会での仲間も自分にとって大きな存在となっています。お互いに会の仕事を担当するなど多忙な中、支えあいながら悩みも共有できる仲間がいます。これも私にとって大きな存在です。

もし、悩んでいることがあったら、自分からまず動いていくことをお勧めします。待っていても解決しません。何でも、外を見してみるなど視野を広げて活動してみると何かヒントが見つかるかもしれません。そう思いながら、私は今後も活動していきたいと思っています。

日本ヒューマンケア科学学会第2回学術集会開催
 — 地域で育むヒューマンケア —

第2回学術集会長 中村 由美子

日本ヒューマンケア科学学会は、保健医療職の連携をめざして本大学教員が中心となり立ち上げた新しい学会であり、学術集会の開催は今年で2回目となります。本学術集会のテーマを考えるにあたり、本学会のキーワードである“ヒューマンケア”と“地域”という言葉がまず浮かびました。私自身も保健師として地域で働いた経験がありますが、保健師という領域だけではなく、看護実践そのものに地域という考え方をもっととりいれたいという思いがあったからです。

現代の少子・高齢化などの社会状況の変化を受けて、虐待やいじめ、自殺などその問題の深刻化にますます拍車がかかっています。現代医療においては人間を全体的（全人的）にとらえる重要性がますます注目されてきてはいますが、依然としてこれらの問題の解決には到らず、ますます大きな問題となってきているのが現状です。しかも、高血圧、肥満などの生活習慣病は子どもたちの生活にも大きな影響を及ぼし、私たちが住む青森県の重要課題の一つともなっています。このような課題を考えていくにあたり、子どもたちが暮らしている地域を念頭においたヒューマンケアがますます必要とされてきていることを実感せざるを得ません。

本学術集会は、10月24日（土）に本学で開催され、学生、学会員などを含め168名の参加がありました。筑波大学大学院の大久保一郎氏の基調講演「保健医療福祉におけるヒューマン・ケア科学の役割」では、臨床経済学の立場からQOLについてお話しいただきました。午後のシンポジウム（市民公開講座）では「地域で健康な子どもを育む～青森県における小児の肥満対策への取組み～」をテーマに、4名のシンポジストからの発表に対して、活発に意見交換がなされていました。秋の季節に、実りのある1日を過ごすことができたと感じています。



ポスター発表会場での風景

平成21年度博士及び修士論文中間発表会について

健康科学研究科長 松江 一

今年も大学院健康科学研究科博士および修士課程の最終学年者の論文作成の進捗状況を示す中間発表会が開催された。今年度は博士課程は7名及び、修士課程は12名でした。博士課程の発表では慣例となった進行役の座長もお互いに行うシステムが定着し、学生および教職員30名が参加し活潑な質疑応答がなされた。修士課程の発表では院生の全員参加を目指していたところもあり、院生および教職員あわせて2日間で延べ200名くらいの参加となり、活潑な質疑応答がされ、例年よりも活気が感じられた。博士課程および修士課程の修了予定者は来年度1月から2月の論文提出、公開発表会、および審査会締め切りに向けて、人生で最高の頑張りが望まれる時期となります。指導を受ける主査を始めとする先生方とも、密なコミュニケーションを取って、健康に留意して頑張りたいと思います。

博士課程の発表者氏名とテーマを以下にしました。

- 1) 看護学分野 村上成明
「知識の洗練と共有を促進する看護管理—看護管理者の実践とその影響の概念化—」
- 2) 生活環境科学分野 向井友花
「高血圧モデルラットの酸化ストレスおよび炎症におけるアズキ抽出物の生理調整機能」
- 3) 生活環境科学学分野 森永八江
「エチゼンクラゲの有効利用—酢クラゲに含まれる降圧成分に関する研究—」
- 4) 看護学分野 跡上富美
「家族形成過程における妊娠先行婚女性と結婚先行婚女性の比較研究」
- 5) 生活環境科学分野 川村 仁
「アピオス花の生理作用及び作用成分の解明に関する研究」
看護学分野 山田明美
「二次救急医療施設における看護ケアの基準に関する研究」
看護学分野 山本加奈子
「ラオスにおける腸管寄生虫症予防対策に関する研究
～予防のための阻害要因と効果的方法の探究～」

修士課程の発表者氏名とテーマを以下にしました。

- 1) 地域保健福祉学分野 生活支援福祉学領域 山口正博
「知的障害者の地域移行に関する考察～ソーシャルインクルージョンと地域移行の展望～」
- 2) 地域保健福祉学分野 地域高齢者保健学領域 中川孝子
「介護保険入所施設における介護職の業務と看護職の関わり方についての研究～老人保健施設と特別養護老人ホームでの実態～」
- 3) 生活健康科学分野 健康・栄養ケア領域 村田まり子
「保育園給食施設におけるリスクマネジメントの実態と改

善支援に関する研究」

- 4) 生活健康科学分野 健康・栄養ケア領域 藤田静子
「介護予防特定高齢者施策における栄養改善プログラムの現状と課題について」
- 5) 生活健康科学分野 食生活科学領域 成田崇信
「青森県産食材由来の抗がん作用を有する成分の探索」
- 6) 看護学分野 小児家族看護学領域 山下 慈
「化学療法を継続して受ける患者と家族のストレスコーピングと適応に関する検討
～患者と家族成員との関連に焦点をあてて～」
- 7) 看護学分野 小児家族看護学領域 奥寺さおり
「慢性疾患児と家族が抱える在宅ケアにおける課題の検討」
- 8) 看護学分野 小児家族看護学領域 崔 美子
「児童の心のヘルスプロモーションに関する一考察—講座前後の自尊感情と親子の関係性の比較から—」
- 9) 看護学分野 小児家族看護学領域 田中栄利子
「小児(科)病棟における付き添い及び面会の実態と関連因子の検討」
- 10) 看護学分野 クリティカルケア看護学領域 船木 淳
「フライトナースの看護実践モデル構築に関する研究」
- 11) 看護学分野 クリティカルケア看護学領域 井上昌子
「ICUという治療環境における患者の体験に関する研究」
- 12) 看護学分野 看護基礎科学領域 漆畑里美
「個性のある看護」の展開に関する研究
—展開を決定する際の判断に焦点を当てて—」



中間発表会の様子

鈴木俊明先生（関西医療大学保健医療学部 臨床理学療法学教室 神経病研究センター教授）による特別講義

平成21年7月22日に本学科学生及び大学院生を対象に4コマにわたり講義をして頂きました。先生は理学療法分野の中で表面筋電図を用いた理学療法評価と新しい治療法の開発に関する研究の第一人者であり、精力的な研究活動及び神経病研究センターでの治療を併せて実践されている方です。今回は当日午前中に行われた学部学生の講義「中枢神経系のリハビリテーション」について紹介します。

先生は最初に理学療法過程を通して症例の動作分析の必要性を強調され、「障害」の中の能力障害の原因を機能障害レベルで予測するための幾つかの視点を教示されました。次いで、起居動作時の重心軌跡、筋活動などを学生に問いかけ、全員に実際の動作をさせることで理解を促す演習形式で授業を進めていきました。その際、先生は全身汗だくになりながらも講義室を駆け巡り、学生全員に理解させようとするエ

ネルギッシュな姿勢には全く驚嘆させられました。最初は学生たちも先生に確認してもらうことを恥ずかしそうにしていたのですが、先生の上手いハンドリングと上手くできた時の賛辞（関西弁でしたが）に先生のペースに急速に引き込まれていくさまから、先生の教師としても優れた資質を持っておられることを窺い知ることが出来ました。講義の後半では先生が提唱されている「臨床動作促進法（CMFM）」の紹介があり、学生達は動作分析を基本とするハンドリングの一部を学ぶことが出来たことは、今後理学療法の治療手技を学ぶ上で役立つものと思われ

ます。なお、今回の講義を終え帰阪されて直ぐに、先生と共同研究者により作製された著書を本学科宛に数冊送っていただき、学部学生に理学療法評価と治療手技の理解を促すようご配慮を賜ったことを記してお礼申し上げます。

（文責：理学療法学科教授 岩月 宏泰）



在宅高齢者虐待の実態とその支援—精神保健福祉士の役割—

講師 安田 真氏

社会福祉学科では、八戸市にあるひかり介護支援事業所に精神保健福祉士として勤務されている安田真氏を講師に迎え、11月9日(月)、「在宅高齢者虐待の実態とその支援—精神保健福祉士の役割—」と題して特別講義を開催した。当日は社会福祉学科の学生をはじめ、150名程の方が参加した。

安田氏はこれまで、精神科病院や社会復帰施設、老人施設等への勤務経験があり、八戸市の基幹型在宅介護支援センター、八戸市地域包括支援センターで高齢者精神保健福祉相談員として勤務されたのち、現在はひかり介護支援事業所において八戸市から高齢者精神保健福祉相談員の委託を受けて、八戸市地域包括支援センターと共に八戸市全域の高齢者虐待、困難事例等の精神保健福祉問題に従事されている。

講義の冒頭では、八戸市地域包括支援センターの概要、高齢者虐待に関する市町村及び地域包括支援センターの役割や責任、八戸市の高齢者虐待の現状を説明し、八戸市における実践、連携体制や支援ネットワーク等について事例を交えながら紹介された。

高齢者虐待の特徴や問題点として、虐待だけでなく、被虐待者の認知症や精神疾患、共依存、養護者のアルコール問題、精神疾患、失業や借金問題など、複数の問題を抱えた家族が多いことを挙げられ、被虐待者に対する支援のみではなく、虐待を行っている養護者に対する支援も重要であると語られた。多問題を抱えた家族を支援するためには、精神科病院や警察との連携など、多様な形態のネットワーク構築が重要であり、一つの機関や専門職だけではなく、他の機関や専門職と協力し、チームでアプローチすることが必要となる。

高齢者虐待の具体的な支援のポイントとして、チームで対応することを基本とし、ケース

を一人で抱え込まないこと、事実を確認したうえで対応すること、アセスメントを行い相手の状況や価値観を理解すること、ケア会議を実施し、情報・支援方法を共有すること、支援方法を振り返り、事例から学ぶことを挙げられた。また、虐待を行っている家族への視点として、加害者・被害者という認識や、家族の対応に問題があるという認識では解決しないと指摘された。家族を理解する力と観察力が必要であり、それが養護者への支援にもつながっていくと話された。

安田氏は、社会福祉士、精神保健福祉士の役割として、様々な機関をコーディネートすること、各専門職や地域の特徴を活かしたネットワークを作ることを挙げ、そのために必要なこととして、他職種の仕事を理解すること、医学的知識や地域にある資源の情報を持っていること、また、自身の精神的なケアを行うことも重要であると話された。

今回の特別講義では、事例を挙げながら社会福祉士、精神保健福祉士が支援を行っていく上で必要なことを自身の経験を踏まえて説明していただき、学生にとって将来実践に携わる際の心構えや姿勢について考える良い機会になったものと思われる。

(文責：社会福祉学科長 大和田猛)



安田氏のご講演の様子

平成21年度研究推進・知的財産センター活動報告 — 学学連携および外部研究資金導入について —

研究推進・知的財産センター長 藤田 修三

同センターでは研究活動の支援事業、知的財産の整備・管理をすすめているところです。今回は学内研究シーズの具体化、実用化に向けた学学連携、および研究助成など外部資金の獲得状況についてご報告します。

○八戸工業高等専門学校との学学連携協定

平成21年3月6日、本学は独立行政法人国立高等専門学校機構八戸工業高等専門学校と学学連携協定を締結しました。平成20年度より経済産業省関連法人工業所有権・情報研修館から丞村宏知的財産アドバイザーに着任いただき、本学の知的財産の整備を進めているところですが、同時に学内研究力評価の一環として、教員の研究シーズ調査を実施していただきました。研究成果を上げている教員が多々いますが、それが例えばベッドサイドの医療用具であったり、リハビリテーションに使用器具である場合、具体化するには工学的な発想、知識、開発力が求められます。本学には工学系分野がないため、研究開発を一層進めるためには工学系研究所や高等教育機関と連携していく必要があるためです。現在、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科教員が、研究シーズの具体化に向けて八戸高専教員と共同研究を進めています。研究成果の実りが期待されるとことです。

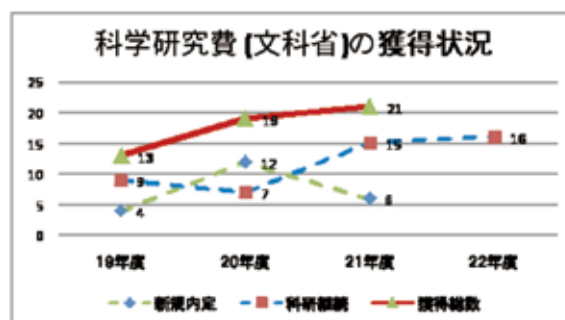
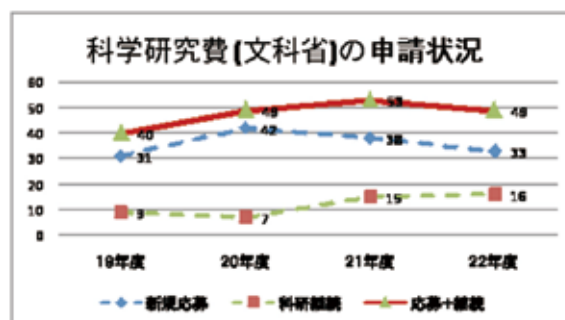
○外部研究資金導入

活彩！保健大学だより第19号では、文部科学省科学研究費について、本学の申請件数に対する補助金内定率が全国レベルに比べて高いことをご紹介しました。大学教員には、研究を実施するための資金を大学だけに頼らず、外部から競争的資金を獲得できるだけの実力が求められており、センターの支援体制およびその成果についてご紹介します。

センター研究開発科委員会では、松江一前センター長の時代より、文部科学省科学研究費を中心とした一層の申請支援活動を行ってきました。科研費申請の締切りは例年11月上旬で、支援策として、夏季休暇前後に、既に補助金の内定を受けた先生方に内定獲得術、また地域連携推進課担当職員から申請のポイントについてFD研修を行っています。

この地道な活動により、申請状況は新規申請件数と科研助成継続件数（該当者は新規に申請できません）を合計すれば、図のように全体的に微増の状況にあります。また、実際の研究費獲得状況は、新規内定件数およびに継続内定件数を合わせれば、はっきり増加が示されます（図参照）。本年度は新たに科研費担当の元文部科学省職員をお招きし、申請書の書き方、アピールの仕方等の講演会を行い、それ以外に科研情報を学内ネットに掲示してきました。来年度の内定件数の増えることが楽しみです。

紹介しましたふたつの話題は、いずれも研究を推進する教員の意気込みにかかっており、それは教育のシーンで新たな知見、説得力のある説明につながり、学生に還元されるものと確信します。



地域と連携した多彩な取組み

地域連携・国際センター長 藤田 修三

本年4月、石鍋圭子元教授よりセンターを引き継ぎ、はや半年が過ぎました。センターを支える地域連携推進課は、昨年度まで課長はじめ県職員4名、専任教員2名および非常勤職員の運営体制ですが、法人化のメリットを生かし、本年度より県職員の1名が大学採用職員と入れ替わり、今後も専属を増やし、地域連携サービスの向上に努めてまいります。これまでの積み重ねの上に、センターの地域連携事業、教育課程は充実してきており、下図に示しました地域連携事業について、現状をご紹介します。

○認定看護教育課程 (図の左上)

5年前に救急看護認定看護師教育課程を開講し、病院ICU(集中治療室)などで活躍する修了生を輩出していますことはご存知のことと存知ますが、本年度よりがん化学療法認定看護師教育課程設置が日本看護協会より認可されました。

両教育課程は、6月4日から12月3日まで半年間にわたり、同時期に開講し、受講生は救急看護12名、がん化学療法16名でした。なお救急看護教育課程は全国で4カ所、がん化学療法教育課程は10カ所に設置されていますが、東北地方で設置するのは本学だけです。

○文部科学省受託事業 (図右上)

平成19年度に文部科学省委託事業『医療安全にかかわる看護技術「静脈注射」の学び直しプログラム』が認められ、21年度までの3カ年間、事業を続け、多くの現職看護師、潜在看護師(現在看護職を離れている看護師)に受講して頂きました。地域からのニーズがあることより今後も開講を続けるか検討中です。

○看護管理者教育課程

平成17年度よりセカンドレベル、平成20年度よりサードレベルの看護管理者教育課程を開講し、本年度はセカンドレベル教育課程を開講し、30名の管理職看護師に履修頂きました。

○産学連携事業 (図左下)

南部地域で自生、栽培されるガマズミの成分を本学の教員が研究し、その新規な機能性を組み入れた食品を地場産業として産学連携し、事業を展開しています。研究の部分では研究推進・知的財産センター事業ですが、それは地域に結びついた社会貢献事業のひとつでもあります。

○青森県委託事業

青森県より社会福祉研修事業の運営を委託され、社会福祉主事資格認定講習会および、新任研修、トップ

セミナー、地域セーフティーネットフォーラムなど一般の社会福祉研修を本年度も実施しました。

○その他の地域貢献事業

1) ケア付きねぶた (図中央下)

1996年から始まりましたケア付青森ねぶた”じょっぱり隊”も14年目を迎え、今年は本学から学生および教員含め100名弱が参加しました。現在は大学のボランティア活動事業のひとつとして定着してきました。

2) オープンカレッジ (図中央上)

知的障害者の学習ニーズに応えるため、本年度も「飛び出せ!地域オープンカレッジ」を開催しました。毎回30-40名の参加者があり、本学学生サークル発達保障研究会のボランティアメンバーが活動の中心となり、ご家族、教員、そしてセンター連携科委員会が支援しています。今や学習活動を通して仲間づくりや本人の発達保障にも資する活動となっています。

3) 国際科交流事業

本年度は夏期に、看護学科学生交流としてベレノバ大学学生、また理学療法学科ではインジェ大学との学生相互交流を行いました。

4) 公開講座

「生活と健康/住み慣れた地域で暮らし続けるために」をテーマに5回の公開講座を開きました。お産事情、ニコニコ体操、ドクターヘリ、救急看護、感染予防、食生活など内容も多彩で充実しており、参加される住民は毎回125~187名(むつ市では17名)、高校生は47~130名(むつ市では47名)と多く方に参加・ご支援いただきました。ドクターヘリの時はTVの影響からか高校生の参加が目立ちました。現在、公開講座の在り方について、住民と一体となった運営体制を検討しています。

以上のように、地域連携・国際センターは地域の皆様のご理解、ご支援を賜りながら、ともに社会貢献に努めてまいります。



かけがえのない日々

理学療法学科3年 柿崎 彩加

私は今回、平成21年8月21日～9月6日の期間で、韓国インジェ大学校との国際交流として、韓国へ留学する機会を得た。

病院では韓国の理学療法の現状を見たり、インジェ大学で学生と一緒に授業を受けたりと、たくさんの体験、勉強をすることができた。しかし、一番印象に残っている、心に残っていることはたくさんの人に出会えたということである。

留学に行く前はホームシックになるのではないかと、不安に思っていたが、そんなことを感じている暇などないくらい、いつも誰かが一緒にいてくれた。病院実習では朝は早くからで大変だったけど、毎日大学院生の方が送って行ってくれた。病院ではPTの方々が私たちにわかるように、実際に体験させてくれ、質問にも丁寧に答えてくれた。現地の大学の実習生もいて、わからないことがあれば助けてもらった。患者さんも知っている日本語を使って話そうとしてくれ、毎日が本当に楽しくて、充実していて、5日間があっという間だった。

学校では、先生方が特別に授業してくれたり、一緒にご飯を食べに行ったりした。生徒のみんなは、いつも大変なことはないか心配してくれた。いろんな場所にも連れて行ってくれて、本当にたくさんの思い出ができた。

言葉の問題も、お互い理解し合おうとすれば下手な英語でも伝わるのがわかったし、通訳してくれる人のおかげで乗り越えることができた。

一人では不安で、こんなに有意義に過ごせなかったであろう。お金で買えない、人とのあたたかさを実感した留学であった。本当に行ってよかった。

かけがえのない日々



2週間の韓国研修

～日本人の真似をする韓国人といわれて～

理学療法学科3年 長岡孝則

2週間の韓国研修は、日本の理学療法との違い・特徴や文化、歴史を学ぶことができた有意義なものだった。5日間のプサン・パク病院での実習では、理学療法の臨床の姿を見ることができた。中でも特に印象的だったのは、各セラピストが必ず電気療法の小型機器を携帯しており、関節を他動的に動かす際も電気治療を用いながら行っていたことである。水治療法のための大きな水槽タンクで様々な手技を見学・体験する機会もあり、学びが多い実習だった。インジェ大学内では、各先生方が専門とする研究の内容を聞かせていただいたり、学生と一緒に授業を受けたりした。休み時間には、学生が積極的に話しかけてきてくれ、食事や観光に誘ってくれた。観光では、歴史的建造物を見に行こう、星空がきれいなところがあると色々な場所へ連れて行ってもらった。また、韓国の料理は甘い・辛いのははっきりとしていて、食べられないほど辛い料理もあったが、どれもおいしい食べ物ばかりだった。インジェ大学を離れる際の送別会では、交換交流の学生だけではなく、多くの学生・先生方と交流することができ、インジェ大学を離れることを寂しく感じた。ソウルに移動してからの自由行動では、韓国の文化を感じながら自分たちだけで行動することの大変さを知り、いい経験となった。言葉の壁を少し感じる面もあったが、知り合ったすべての方々優しく接してくれ、会う人ほとんどに「おまえの顔は韓国人だ」と言われ続けた、かけがえのない2週間だった。



卒業生対象研修事業について

地域連携・国際センター研修科長 佐藤 恵子

本学も開学10年を経て、7期生まで約1千人を超える卒業生を送り出しています。以前から、様々な現場で専門職として働く卒業生を対象とした研修会の実施を望む声があがっていました。そこで、研修科では、平成20年度から新規事業として、卒業生を対象とした研修事業を立ち上げることとしました。各学科によって卒業生の人数や就職先、研修ニーズなどの事情が異なるため、初年度の平成20年度には、看護学科と理学療法学科で試行的に実施し、その結果を踏まえて今年度は社会福祉学科をあわせて3学科で開催しました。

看護学科では、8月4日、10:00~12:30の日程で講演と交流会を行い、卒業生15名と在校生11名、教員10名が参加しました。

理学療法学科では、11月22日、13:30~16:30の日程で研修会を行った後、懇親会を設けました。卒業生19名と在学生13名が参加しました。

社会福祉学科は、大学祭にあわせて10月10日、10:00~11:30の日程で講演と交流会を行い、卒業生17名が参加しました。

開催にあたっては、各学科とも卒業生の連絡先を把握する作業から始まり、開催日程や場所、内容の決定に至るまで様々な苦労を重ねました。その甲斐あって、参加者からは“参加してよかった、今後も続けて欲しい”との声が寄せられ、事業担当者からも、“卒業生のための研修会ではあるが、卒業生同士の縦、横の繋がりを広げるだけでなく、卒業生と在校生の交流の場にもなっている”と高い評価がなされています。今回の実施により、卒業生対象研修事業の必要性和意義について確認できたことを踏まえて、今後はできるだけ多くの卒業生が参加できるように、より一層工夫を重ね有意義な研修会にしていきたいと考えています。平成23年度には栄養学科からも初めて卒業生が輩出されます。将来的には、各学科による研修会と共に同窓会ともタイアップしながら、4学科の全卒業生を対象としたフォーラムを開催できればと考えています。

公開講座実施報告について

～開学10周年記念公開講座～

地域連携推進課 高坂 修一

本学地域連携科委員会では、県民の生涯学習や知識の向上を支援するため、一般県民を対象とした「公開講座」を毎年開催しています。平成21年度は開学10周年を記念した公開講座でもあり、テーマを「住み慣れた地域で暮らし続けるために」と題して、学内外の講師により次の10本の講座を開催しました。第1回（5月23日）「いまだきのお産事情」（看護学科 佐藤愛講師）、「いつでも・どこでも・だれでも「ニコニコ体操」の紹介」（理学療法学科 山下弘二准教授）、第2回（6月13日）「凍結路の安全な歩き方について科学する」（理学療法学科 岩月宏泰教授）、「感染予防に生かす知識と技術」（看護学科 福井幸子講師）、第3回（6月27日）「青森の救急医療事情と救急看護」（救急看護認定看護師 平尾明美氏）、「救急医療用ヘリコプター（ドクターヘリ）による救命救急活動～フライトナースの活動と役割について～」（看護学科 船木淳助手）、第4回（7月11日）「より良い食生活とは」（栄養学科 齋藤長徳講師）、「生涯学習について考える～いろいろな人の「学び」の実践から～」（栄養学科 廣森直子助教）、第5回（7月25日）「障がいのある人たちに対して私たちができることについて一緒に考えてみませんか」（社会福祉学科 石田賢哉講師）、「地域で実践できる！自殺予防活動」（社会福祉学科 坂下智恵講師）。第1回～第4回は本学大講堂、第5回はむつ市の下北文化会館で実施し、延べ合計数で1,647人の受講者がありました。受講者の内訳としては、一般受講者642名、本学学生607名、高校生398名となっており、高齢の方から若い方まで幅広く受講していただいております。各講座では、実技を交えた講義や、わかりやすいパワーポイントの作成など、それぞれバラエティ豊かな講座が実施され、受講した高校生や一般の方から熱心な質問を受ける場面も数多くありました。今後、地域連携科委員会では、これからの公開講座のあり方として、大学の教職員以外に地域の皆様にも御参画をいただき、地域と一層連携した公開講座の運営を検討することとしておりますので、よろしくお願い申し上げます。

保護者（後援会）懇談会について

学生部長・学生委員会 藤井 博英

今年が開学10周年を向かえ、記念事業としてねぶた製作者の竹浪比呂央氏の指導下、学生が主体で「鍾馗様」というねぶたを製作しました。鍾馗とは、主に中国や日本の民間伝承に伝わる道教系の神です。日本では、疱瘡除けや学業成就の効があるとされています。また、彫刻家である向井勝實氏と学生や近隣住民が県内ヒバでモニュメントづくりの制作に携わりました。このような中、平成21年度保護者（後援会）懇談会は、平成21年10月10日（土）13:00から教育研究C棟3階N講義室2において開催され、37名の保護者の皆さんにご出席いただきました。

保護者（後援会）懇談会は、学生の生活対策・支援の一環として毎年1回、大学祭初日に開催しています。保護者（後援会）懇談会では、本学の教育方針や教育体制、学生の修学状況や就職サポート体制、国家試験対策を説明しご理解いただく機会として実施しています。保護者の皆様から大学に関する率直なご意見・ご要望を傾聴し、今後の教育・学生支援の一層の充実の一助としています。さらに、教員と保護者、保護者同士の交流を図ることを目的としております。

全体会ではリボウィッツ理事長及び後援会長のあいさつの後、学部長から本学の教育方針や現況が報告されました。

全体会及び学科別プログラム後の個別相談には、看護学科3名、理学療法学科1名、社会福祉学科2名、栄養学科1名の計7名の保護者から申し込みがあり、主な相談内容は①国家試験対策、②青森県内の就職状況、③就職サポート、④助産師コース、⑤授業料の減免等でありました。面接終了後に保護者の皆様からは、「安心した」、「詳しく分かってよかった」等の評価をいただいております。

また、出欠席FAXのアンケートでお寄せいただいた多数のご意見、ご要望、提言については、大学全体として直ちに対応できるもの、中長期的に対応していかなければならないものとして検討・改善を重ねていきたいと考えています。

今後とも多くの保護者の皆様にご参加いただき、より一層のご協力、ご指導を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

保健室つれづれ

保健嘱託員 竹浪 幸子

最近の「美」のイメージもありますが、女性の体型がより細くなる傾向があります。保健室でも「やせ」に伴い、低体温や月経不順を引き起こしている女子学生がみられます。将来、保健医療福祉の専門職になる皆さんには、まずは自分のからだに思いをかけ、しなやかで丈夫な心身を育ててほしいと思っています。

さて、「新型インフルエンザ」が世界的に猛威を奮っている昨今です。とりわけ、医療機関や施設実習のある本学にとって、感染症対策は重要課題のひとつです。本学では、入学時健康診断において抗体検査を実施し、抗体価の低い項目には予防接種をしております。その成果として平成19年麻しん流行時には感染者は皆無でした。

新型インフルエンザに対しても、危機管理対策本部を中心に刻々と変わる最新情報をもとにHP・学内掲示板・教職員による健康観察などあらゆる場面で予防

の周知と感染者の早期発見、感染した学生への支援をしています。

保健室でも受診相談、自宅療養のポイント、経過観察、体温計

の貸し出しなど、特に一人暮らしの学生にはきめ細かなサポートを心がけております。全学で感染拡大の防止に努めていることにより、授業や実習に大きく影響することなく経過しているのは、保健に関わる本学の「力」と言えます。

これを機に一人ひとりが一層の自己管理能力、免疫力を高める生活を続けてほしいと願っています。



保健室では、心身の健康をサポートしています。カウンセラーや産婦人科医相談の窓口にもなっています。

大学見学及び出張講義の状況

学生募集対策委員会

〈大学見学〉

本学では、各高校の希望に応じて、大学見学会を開催しています。

キャンパス内の見学はもとより、教員による模擬授業や学生による入試体験談やサークル紹介など通じて、本学への理解を深めていただきたいと考えています。

今年度はこれまでに（11月20日現在）、高校13校（田名部、むつ工業、青森中央、大間、弘前南、大湊、一戸、中里、野辺地、岩木、七戸、黒石、十和田西）、中学校1校（三本木付属中）が見学に訪れています。

〈出張講義〉

出張講義は、高校生にとってみると、大学教育への理解を深め、進路選択の手助けとなる大切な機会です。

本学では、県内、県外を問わず、可能な限り講師を派遣しています。また、各高校独自の進学相談会にも積極的に参加しています。

今年度はこれまでに（11月20日現在）、13の高校（大湊、市立函館、八戸南、弘前南、由利、青森東、釜石、弘前中央、青森戸山、角館、盛岡北、八戸北、青森南）で出張講義を行っています。



平成22年度入学者選抜試験のお知らせ(学部・大学院)

青森県立保健大学では、以下のとおり平成22年度入学者選抜試験を実施します。詳しくは募集要項をご覧ください。

● 健康科学部一般選抜 募集人員及び入試日程 ●

日程区分		前期日程	後期日程
募集人員	看護学	47名	8名
	理学療法	14名	3名
	社会福祉	25名	6名
	栄養学	20名	4名
入試日程	出願期間	2010年1月25日(月)～2月3日(水)	
	試験日	2010年2月25日(木)	2010年3月12日(金)
	試験場	青森会場(本学) 八戸会場	青森会場(本学)
	合格発表	2010年3月9日(火)	2010年3月23日(火)

● 大学院第2期募集 募集人員及び入試日程 ●

課程区分		博士前期課程	博士後期課程
募集人員	地域保健福祉学分野	15名 社会人特別選抜等を含む	3名 社会人特別選抜等を含む
	理学療法学分野		
	生活健康科学分野		
	看護学分野		
入試日程	出願資格認定審査期間	2010年1月4日(月)～1月8日(金)	
	出願期間	2010年1月18日(月)～1月22日(金)	
	試験日	2010年2月6日(土)	
	試験場	青森会場(本学)	
合格発表	2010年2月15日(月)		

〈お問い合わせ先〉 教務学生課入試担当 TEL:017-765-2144 FAX:017-765-2188 Mail:nyushi@auhw.ac.jp

<新任紹介>



社会福祉学科教授 (H21.10.1付)
出雲 祐二 (イツモ ユウジ)

10月より秋田看護福祉大学から参りました。専門は高齢者福祉です。日本は世界でも有数な高齢社会で、青森県や秋田県はその先端を走っています。そこで研究と教育ができることを喜んでます。宜しくお願いします。



(H21.10.1付)
Ronald Crews (ロナルド・クルーズ)

I'm from sunny California. I've been in Japan about three years now. I spent two years in Towada before moving to Aomori City. I'm very interested in sports nutrition and injury rehabilitation. When I'm not here you can often find me in the weight room at Aoi-mori Arena.

私は太陽の降り注ぐカリフォルニアから来ました。日本に来て三年になります。青森に移る前には二年間を十和田市で過ごしました。私はスポーツ栄養と傷害リハビリテーションに強い関心を持っています。保健大にいないとき、青い森運動公園のトレーニングルームにいけば私を見つけることができるかもしれません。



(H21.4.1付)
Ernest May (アーネスト・メイ)

I was born in Cody, Wyoming in the United States of America. I moved to Hood River, Oregon when I was 4 years old and grew up there. I am married and my wife is Japanese. She is from Aomori City. We have two children, a boy age 7 and a girl age 5. We love Aomori and live for Nebuta.

私はアメリカ合衆国ワイオミング州のコディで生まれ、4歳の時オレゴン州のフッドリバーに移って、そこで育ちました。私は結婚しており、妻は日本人です。彼女は青森出身です。私たちには2人の子供がいます。7歳の息子と5歳の娘です。私たちは青森が好きで、生き甲斐はねぶたです。

編 集 後 記

《活彩！保健大学だより第21号》をお届けします。

今年は世界的に新型インフルエンザが流行し、混乱も見られました。これからの季節、従来の季節性インフルエンザと新型インフルエンザが重なって流行することが予想されます。国家試験や入試なども控えておりますので、マスクの着用や手洗いうがいなどの予防に努め、健康管理には気をつけていただきたいと思います。

さて、本学は昨年度開学10周年の節目を迎え、今年度は10周年記念事業として10周年記念誌の発行や10周年記念式典の開催をはじめ、ねぶた製作、光の森プロジェクトなどの事業を行ってきました。本号にも10周年記念事業の紹介を掲載しております。その他、ワイガヤ会、卒後セミナーの開催など、新たな取り組みについても紹介しておりますので、是非ご高覧いただきたいと思います。お忙しい中、原稿をお寄せいただいた方々には深く感謝申し上げます。

(広報情報委員 種市寛子)